イスラエルはガザ地区およびヨルダン川西岸に対する非人道的な攻撃をただちに停止してください

2023年10月7 日にパレスチナのイスラム抵抗運動「ハマース」によってイスラエルに対する大規模な攻撃が行われ、1,200 人にのぼる民間人の犠牲者を生むとともに、346 人の兵士が戦闘で死亡したと伝えられている。拘束された255 人の人質のうち、101 人がいまだに家族の元に帰ることができていないという。

その後、イスラエルとハマースの戦争は長期化・過激化し、ガザ地区に対するイスラエルによる攻撃によって、2024年9 月25日時点で、41,495 人が死亡し、96,006 人が負傷したと報告されている。イスラエルは、ガザの病院や学校など民間施設に対する攻撃を繰り返し、国際人道法に反したジェノサイドと呼ぶべき非人道的な武力行使を続けている。実際、イスラエルのガラント国防相はパレスチナ人を「人間の顔をした動物」と述べ、人をご自身の似姿に造られたという神のご意志に反した住民虐殺を繰り返している。

2023年10月27日に、国連総会において停戦決議が圧倒的多数で採択されたが、G7加盟国とそれに追従する国々は総じて反対・棄権し、日本も投票を棄権した。ドイツやフランスではパレスチナ連帯デモが禁止され、さらにドイツの裁判所ではガザの事態を「ジェノサイド」と形容することを禁じる判断が下されたことが報道されている。イスラエルを批判することは「反ユダヤ主義（アンティ・セミティズム）」であるとの主張があるが、ナチズムによるホロコーストに匹敵する民族浄化を強行しつつあるイスラエルを批判することなくして、ナチズムの克服はありえない。

もちろん、大規模な武力攻撃を行い、人質を取ったまま解放しないハマースは強く非難されるべきである。しかし、長期間にわたって狭い空間に閉じ込められ、通行や物流が厳しく制限され、電気や水道という生命に関わるインフラの遮断という形で「生殺与奪の権」を握られてきたパレスチナの人々が、民族としての生存の危機に晒されてきた歴史的背景は考慮されるべきである。

旧日本基督教会も「満洲」に移民を派遣し、艦上爆撃機を奉献した経験を持っている。私たち自身、セトラー・コロニアリズム（入植型植民地主義）を推進し、アジア・太平洋戦争の遂行に加担した旧日本基督教会の罪責を受け継ぐものとして、今大会において、悔い改めをもって、イスラエルに対して、以下の要請を表明したい。

１）イスラエルはガザ地区およびヨルダン川西岸に対する国際人道法に反する攻撃を即刻中止し、医薬品や食料の搬入を認めると共に、水道や電気等の

インフラを速やかに復旧してください。「殺すなかれ」と命じられた神の戒めを守ってください。

２）イスラエルは、国内において、シオニズムを神の律法からの逸脱であると主張する人々、徴兵を拒否する人々、戦争反対を訴える人々を弾圧せず、平和を求める民衆の声を聞いてください。

2024年10月18日　日本キリスト教会第74回大会

（文中の数字は『世界』11月号に掲載されている錦田愛子「イスラエル・ガザ戦争の一年」によった）